

資料に見る黎明期の堺中学蹴球部

元三国丘高等学校保健体育科教諭
元サッカー部顧問・監督(高校12回) 馬越 敏行

わが国にサッカーがもたらされたのは1873年(明治6年)とされている。明治10年には体育伝習所(後に東京高等師範学校、東京文理大、東京教育大、筑波大)の教科にフットボールが取り入れられており、学校の先生や教育関係者によって全国に普及して行くようになり、また、外国(主に英国)からの宣教師や英語教師等からサッカーが伝えられ、各地でぽつぽつ学校の対抗試合も行われるようになっていった。

わが大阪府立堺中学校では、大正時代に入り生徒の急増期を迎え、「校友会」(現生徒会の前身)の組織が整備、充実され、それ以前の運動部系が分割、専門化され「運動ニ対スル趣味ヲ養成」の目的で、第3年級以上に蹴球のほか庭球、端艇(ボート)、角力、柔道、剣道等を生徒各自に選択させ、毎週土曜日の放課後に時間を定め練習させていた。

校友会誌「茅渟の海」には、大正3年に「蹴球部」が創立されたとあるが、大正5年に広島高師出身の近藤教諭(博物・修身)が、豊かな経験を生かし部長・顧問を兼ね熱心に指導され、ようやく「蹴球部」としての面目を保つに至ってその基礎が固まったとされている。当時の先輩諸氏もこの時期を「蹴球部」創立の年と認識していたようである。こうしてその年の夏頃から正式の試合をやり始め、漸く存在が認められかけてきた。ちなみにこの年(大正5年)における校友会の「蹴球部」の決算は34円75銭であった。

創立当時の蹴球は、「珍しい競技として、特に其の中空高く蹴上ぐるボールの勇壮な快味は、意気にも焰ゆる青年に歓迎され、昼の放課には運動場に出されてあるボールは当時の在校生徒達の興味の中心であった。」(「茅渟の海」第55号)と記されている。

そんな折、東京で開催された第3回極東選手権大会で、我が国のサッカー初の公式国際試合において日本は惨敗に終わり、関係者は「何とか日本のサッカーを強くしたい」と相談、東京・名古屋・大阪でそれぞれ別個の大会をやるようになった。

大阪毎日新聞社は、大正7年1月12・13日に第1回日本フットボール優勝大会を豊中運動場で主催することになった。我が堺中蹴球部では、この大会に出場することに決まったのは12月も押しつまった17、18日頃で、やがて選手候補者とその相手になってもらう人達とを選び、25日から練習を始めることになった。いよいよ試合当日、相手は神戸一中。前半4点、後半3点、0対7で大敗。萬谷(中20期)は、「この大敗の原因は種々あるが、その主たるものはキックの力の不足と連絡の不正確なことだ。この二つは神戸方の長所で、敵ながらも天晴れであった。(略)本校のチームは未だ若い。まだまだ発達の余地がある。

過去は追う必要がない。ただ未来の成功を望みつつ、向上の一路を進めばよい」と蹴球大会出場記（「茅渟の海」第40号）に記している。

この第1回日本フットボール優勝大会には8チームが参加、大阪からはわが堺中と明星商が出場し、優勝は御影師範（第7回大会まで連続優勝）であった。翌年、第2回大会でも初戦で神戸一中と対戦したが、前半は善戦し0-0、後半は疲労がもつて2失点し敗退。萬谷は、この試合を「第一にモーシヨンの鈍いことで敵に比して大いに遜色がある。（略）我が選手はキックは相当利くがノーバウンドで蹴ることが不得手である。敵のバックは巧くノーバウンド又はショートバウンドで蹴っている。第二は、ランニングの不足で、もう少し短距離の練習をせねばならぬ。第三は頭の悪いことで今少し冷静にしてよく連絡をとらねばならぬ」と記している。（「茅渟の海」第41号）

大正8年12月、堺中校庭で岸和田中と初の対校試合が行われ2対1で勝利。その後岸和田中からの要請で指導的に先方の学校に練習試合に行き、4対1で勝利を得、我が堺中蹴球部は年齢僅かに3才漸く斯界に認められるようになった。その直後、「我が部の最も期待していて一年に一度我が部の技を示すべき第3回日本フットボール大会は、大正9年1月17・18両日豊中グラウンドで行われることとなった。我が選手は1年間臥薪嘗胆の思いで待っていた日なのだ。我等は冬日も毎日練習し、そうして先輩諸君の御指導で最早出場と定まって相手の学校も和歌山中学と決していた。その時あの恐るべき且つ憎むべき流行性感冒は本校を犯し休校の止むなきに至った。それが為に大会出場の事柄は中止された。しかもたった一日前なのだ。我等選手の無念さは如何だろうか、諸君よ察してくれ給え。一年臥薪嘗胆の思いで練習したのも一日で水泡に帰して了った」。5年江口が後に記しているが、（「茅渟の海」第42号）かくして第3回大会には直前に棄権となったのである。この年から岸和田中も日本フットボール大会に参加出場。

この頃、校内においては「蹴球小会」なる対抗戦が毎年冬季に行われており、1年から5年まで組単位で出場、覇を競った。蹴球部員もちろん選手として出場するが、審判も引き受けた。時には先生チームとの親善試合が組まれたり、出場チームも学年選抜や野球部、寄宿舎選抜など参加チームは次第に増え、蹴球部の年中行事として漸次盛大に行われるようになり、予選から決勝まで1週間を要するに至った。毎日2試合を実施後、部員一同は猛練習を始めたそうである。

大正10年2月11～13日に行われた第4回日本フットボール大会では、初戦御影師範と対戦。体格の差は如何ともし難く0対5で敗れた。立上（中23期）は大会出場記に「私はこの惨敗の原因は次ぎの5点に記すものと思ひます。第一はモーシヨンの鈍いことです。

例へば蹴り得べきボールであるのに、ノーバウンドやショウトバウンドで蹴ることが出来ず、止むなくワンバウンドで蹴ると言うようなことです。(略)第二はランニングの不足です。(略)もう少し短距離の練習をしてください。若しランニングが不足したら蹴り得べきボールをも、蹴ることが出来ないのが当然です。第三はヘッドに就いてです。味方がヘッドしたならば、必ず上方か後方に飛び去ります。ヘッドの要は前方へ飛ばすことを以って第一としています。御影師範などはヘッドを自由自在に使ってパスなどをしていました。第四はドリブルの大きい事です。も少し小さなドリブルをして、敵を攻めることが重要な点ではなかろうかと思ひます。第五は頭の悪いことです。此のようなことを言うと非常に失礼に当たりますが、今少し冷静に考へて、宜く連絡をとらねばなりません。是等の事は研究するに、大なる価値のあるものと思ひます。今後共練習の際には、何卒右のような点に注意して、真面目に、熱心に、之を矯正して頂きたいのです」。(「茅渚の海」第43号)と後輩に向け記している。

翌、大正10年9月に大日本蹴球協会が設立され、堺中学校校友会蹴球部も加盟登録。この時の加盟登録チーム数は全国で65であった。大阪からは堺中の他、明星商、岸和田中、桃山中、天王寺師範、池田師範、市立工業、関西大、大阪サッカークラブの9チームが加盟した。

大毎主催の日本フットボール大会に第1回から出場してきた堺中は、大正11年の第5回大会では姫路師範に0対1、翌年の第6回大会では前年と同じ姫路師範に0対2、第7回大会では奈良師範に0対3といずれも初戦敗退を喫した。

この当時のサッカーのスタイルは、いわゆる「キックアンドラッシュ」で遠くへ蹴って早く走りつく。ドリブルでも、ボールを突き出しておいて走るといような荒削りな戦法で、1対1の激突が随所に見られ、従って体力の優れているものが勝つということは殆ど間違いなかった。師範に対する中学では年齢に2歳のハンディキャップがあり、体格も劣り、この劣勢を補うために次第に戦法が変わってきた。所謂ショートパス戦法に移っていく過程にあったといえよう。このショートパス戦法をいち早く取り入れたのが神戸一中と云われており、第7回の大会で、ショートパスを中心とするチームワークによる試合の進め方の効果がようやく現れてきたとされている。

第8回大会は出場申し込みが多数に達し初めて紀和大阪予選が実施され、大阪の覇者桃山中に0対2で敗れ連続出場はならなかった。第9回大会からはさらに全国を8地区に分け予選制度がしかれ、堺中はその後昭和6年の第13回大会まで出場はかなわなかった。この当時の大阪からの出場チームは、堺中の他、高津中、桃山中、明星商、天王寺師範、泉尾工、池田師範、市岡中、大阪工、生野中、今宮中、都島工などで、阪和大会の優勝

校が本大会に出場していた。

堺中蹴球部はこの頃、部員不足の苦しみにも耐えながら、部員達は弛まざる努力を重ね雪辱の日を期していた。

「茅渚の海」第51号には、蹴球部報として「明けゆく春のグラウンド 希望と活動！ 鉄の様な足の交錯 さては来るべき運命にあった蹴球の時代は来た。扱我部は例年の如く幾多の闘将を失ったが更生の意気に燃える新選手並に部員一同夕暮に至る迄汗と砂にまみれ校友諸君の期待に報ゆ可く務めて居る次第である」。と記され、次号の「茅渚の海」第52号には「蹴球は時代的ゲームです。今更蹴球についてクドクド云うのは頭がどうかしていることになるんじゃないでせうか、それは時代に十歩も後れているんですからね。どうかするとその人の頭には青カビが生えかけていることさえあるんですからね。蹴球は百パーセント、ファイティグ・スピリットです。男性的な又シークなゲームです。下級生諸君よ！ 老いて美しい思ひ出を持つものは幸福だとか申します。この堺中にいて五年間何一つスポーツをせず、何ら美しい思ひ出を過去に持たず、あのくちた門を出たことを悔いている卒業生が沢山いるのです。もうB組チームは編成されています。だがいくらかでも結構です。諸君！新しいゲーム、蹴球をやりませんか？冷たい熱情で明日へ進むのです。初夏は憂鬱です。だがスポーツの雰囲気では僕達は朗らかに哄笑しますよ。諸君！スポーツに関心をお持ちなさい、特に蹴球には。それは現代人の一資格ですから。新鮮に朗らかに美しく、僕達は冷たい熱情を持って進みます。では」。と呼びかけている。

はたせるかな、苦節10年余。6年ぶりの第13回全国大会出場を決めたその時の喜びと感動、また、初めて初戦突破を果たすも準決勝戦で無念の敗戦を喫した様子を、昭和6年の堺中学文芸部「翹望」蹴球部報に次のように記されている。

「昭和五年十二月十三日は我堺中蹴球部にとって永久に記念すべき日であった。大毎主催第十三回全国中等学校蹴球大会サッカー部阪和代表決定リーグ優勝戦 - 選手達の蒼白な表情 - グラウンドを囲む幾多の校友と先生方 - 無我夢中の熱戦であった。 - 薄暮の中に湧き上る大歓声 - 優勝旗を持つ手は慄え熱い涙がこみ上げて来た。夢のやうな現実であった。『やって呉れた。ようやく呉れた』選手権の存在の為試合ごとにグラウンドの外を廻り歩いたと云はれるありし日の名プレイヤーは僕の肩に手をかけてうつむいた。あの歓声の中で誰が笑へやうか？表面は如何にも笑ふべき幸福なる姿であるかも知らぬ。而し、暗転に暗転を重ねた屈辱の歴史の底に流れる幾年の涙を知るか？淋しくも去った報ひられざる幾多の犠牲を知るか！後輩蹴球部員よ。ローマは一日にしてなりしにあらず。されどポンペイは一日にして滅んだではないか？兄等堺中蹴球部員よ！十三年の急従を後、華やかに咲き出たこの歴史を汚してはならぬ。

新春南甲子園のローンの上には鮮やかにラインが引かれ、集まる地方の雄とそれぞれ

の優勝旗、奏楽の音に行進が始まる。憶へ！大日章旗は我々の手で高々と新春の空に昇り、濱風に翻ったではないか！、だがその後我々はどうであったか？、船頭多きにすぎ、しか否はいざ知らず完全にスランプに陥って函師に3-1、準決勝戦で広島一中に0-1で敗れた。全国有数の名ゴールにF・B（殊に専門学校級の佐治）を持ち、力に差はあるとは云えそろってねばり強いH・B線を持ちながらフォワード線の不調の為め一点をも得ず、その上トスで負けたため前半は猛烈な風下で全部後退して専ら防御に務めたが不覚の一点を得られ、後半チェンジすると風は止み……コンディション五分五分の試合となり、必死となって攻め立てるも一中後退して防御につとめフォワード線の不調は常にチグハグとなり、幸いに捕ふればのがさぬチャンスも一中の捨身の戦法功を奏し……響き渡る試合終了のサイレン！……無念さにじっと唇を噛んだあの瞬間、スタンドの黒い人影がぼやけた。ああ我々の双肩に荷った責任は何処へ行ったのだ堺中が、大阪和歌山が踏みつけられた様な気がした。実力を持ちながら、その実力を出しえず、敗惨の苦汁の晴れの舞台でなめた程悲しいことがあるか。（以下略）」。

後に昭和7年の「茅渟の海」第54号には「今を去る二年前突如全日本中等学校サッカー界に一大爆弾が投ぜられた。即ち吾が蹴球部の惑星的出现だ。一度阪和二十校を代表して甲子園原頭に現れるや吾が部は準決勝に広島一中に0対1の成績にまでこぎつけて全日本の人々をして茲に始めて堺中の存在を認めしむるに至った。（以下略）」。



第14回全国中等学校蹴球選手権大会第3位のメンバー 〈写真提供=中48・納 善一〉

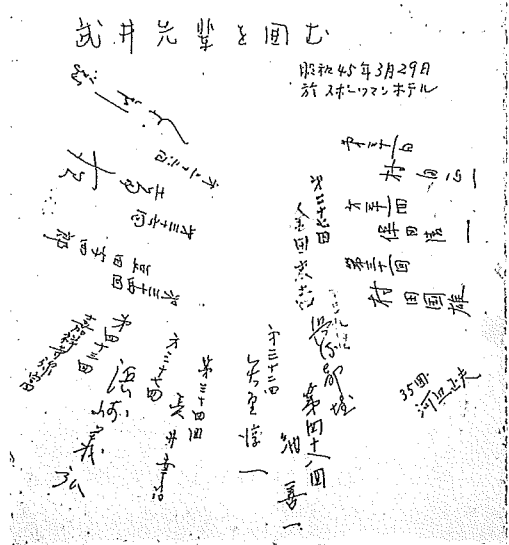
翌年の第14回大会でも初戦富山師範に4-1で快勝。2回戦で京都師範に0-1で惜敗したが、この頃が堺中蹴球部の創部以来の最強チームであったと考えられる。当時の出場選手の中に、後に池田高校の全国制覇（第28回大会）の時の部長・監督であった矢野（旧姓織田）氏や、部歌の作詞者でもあり卒業後も後輩の指導に情熱を注がれた武井昇氏、後に長年にわたって三国丘高サッカー部の監督をされた河辺氏の名前が見える。

蹴球部部歌が創られたのも、この大会出場が契機となったもので、学校中が大いに沸

き立っていた。当時の部員のサッカーに賭ける情熱と、栄冠を勝ち得た喜び、先輩達への畏敬の念を込めた武井昇氏の詞に、細田彌三先生（物理・化学）が作曲されたものである。爾後、部歌として、栄冠を勝ち得たグラウンドで円陣を組み、感涙に咽びながら歌い継がれてきたのである。

その後の全国中等学校蹴球大会の阪和予選では、昭和7年に池田師範に敗れ、この敗戦について堺中雑誌部「御駐蹕記年号」蹴球部報に「忘れもせず。去年の十一月二十日、第一次予選の最終戦である、池田師範との試合に於ける、あの吾等のつい耳響かざりしタイムアップを……。

今度の敗戦こそ実に吾が中興堺中蹴球部の将来に対する一大危機である。そして此の危機こそ、天より吾等に附与せられし一大試練である。来るべき年度に於ける、吾が部が双肩に担う者は、此れに善処する覚悟が無くてはならぬと。そうだ、吾等は此の天の与へし一大危機を、一大試練を切抜けて行かねばならぬ、切抜ける則ち善処する道とは、より以上に団結を鞏固にし、今年こそと校友諸君に誓うことが大切で



名プレーヤーとして、堺中・三国丘高校サッカー部部歌の作詞者として知られる武井昇先輩を囲む会 昭和35年3月 スポーツマンホテルにて
 <写真提供=中48・納 普一>



大阪府ジュニア大会優勝記念
 昭和10年1月 <写真提供=中36・中尾(杉坂) 修三>

固にし、今年こそと校友諸君に誓うことが大切である。

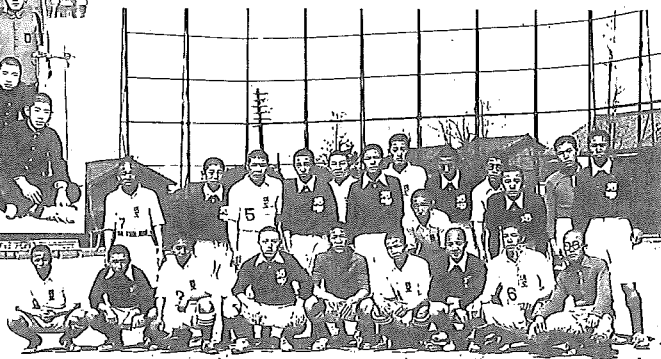
吾等は誓ふ！ 吾等は誓ふ！ 栄冠奪回を！ 屈辱の後に来るもの、其れは唯苦、苦闘あるのみだ。（以下略）」と記されており、その後昭和11年に第18回全国中等学校蹴球大会に阪和代表で出場するが、初戦で岐阜師範に3-9で敗退。昭和13年の予選では豊中中、桃山中、天王寺師範を倒し破竹の勢いであったが、決勝戦で明星商に1-2の接戦で敗れ、この後第2次世界大戦のため中断も含め明星商が連続阪和代表として出場することになる。

戦後、中等学校蹴球大会復活の準備大会として、関西学院主催の中等学校蹴球大会を毎日新聞社が後援して8月27日～9月1日、西宮球技場に近県の19チームを招待し開催され、堺中も久々に登場。初戦住吉中に5-1、2回戦京都二中に3-0、準々決勝戦市岡中に2-0、準決勝戦神戸一中に0-3という結果で終わった。

こうして戦後の復活第1回（通算は第26回）は昭和22年12月に会場を南甲子園から西宮球技場に移し再開されたのである。そして昭和23年の学制改革により、大会名も全国高等学校蹴球選手権大会と改称された。ここに、新生三国丘高校蹴球部の新たな栄光に向けての第一歩が踏み出された。



(写真提供=中44・藪野英夫)



引用・参考資料・文献

「日本サッカーのあゆみ」昭和49年

－日本蹴球協会創立50年記念出版－ 日本蹴球協会編 講談社

「高校サッカー60年史」昭和58年 全国高等学校体育連盟サッカー部編 講談社

「大阪高校サッカー三十年史」昭和53年 大阪高等学校体育連盟サッカー部編

「大阪高校サッカー五十年史」平成11年 大阪高等学校体育連盟サッカー部編

「三丘スポーツ史」昭和52年 三丘体育会 編

「財団法人日本サッカー協会75年史」平成8年 財団法人 日本サッカー協会

「全国高等学校体育連盟50年史」平成11年 創立50周年記念誌編集委員会編

「大阪高等学校体育連盟50周年記念誌」平成10年 大阪高体連50周年記念事業企画委員会編

「なにわのミニスポーツ史」平成15年 白銀 茂夫著 丸善出版

「三丘百年」平成7年 大阪府立三国丘高等学校 記念誌委員会

「茅渚の海」第40号(大正7年)～54号(昭和7年)、
「翹望」堺中学 文芸部(昭和5年)

「御駐蹕記念号」堺中学 雑誌部(昭和8年)